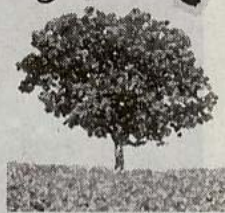


# いのちの樹



● 第1部 — 芽生える

003

長いコック帽をかぶった長身のシェフ二人が、目の前でフライパンを振っている。ニンニクをいためるおいしそうな香りが漂ってきた。

「子育ての現実に戻る前のほうびかな」。お産から解放され、満足している。ニンニクを揚げにパスタをフォークに絡めていく。

「手ぶらで産める」と

「環境の快適さとい

「見ただ目で競っている

「安全という最大のサー

「安全という最大のサー

「安全という最大のサー

## 安全前提に付加価値演出

丸や四角のテーブルが並び室内は、まるでしゃれたレストラン。テーブルに着くお客さんが、すっぴんにピンクのパジャマという、赤ちゃんを産んだばかりの女性である

四日市市川島町の「おばたレディースクリニック」。毎週二回、高級ホテルからヒントを得たという院内のオープンキッチンで、昼食のバイキングを開いている。

好みのメニューを注文すれば、できたてをシェフが運んでくる。デザートは、溶けたチョコに一口サイズのシュークリーンやいちごを付けて食べる「チョコレートフォンデュ」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

### 今どきのお産

少子化の波に、産婦人科の

一人で月三十件のお産があれば上々という中、月に五十一六十件扱う県内屈指の人気クリニックに成長した。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

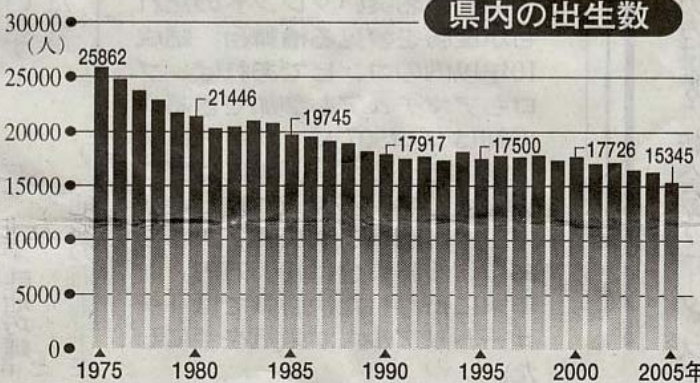
「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。

「赤ちゃんが元気で生まれるのが当たり前。それを前提に、プラスアルファを求めるのが(お産に対する)今の考え方」。



オープンキッチンで週2回開かれる昼食のバイキング。レストラン並みのデザートも。四日市市川島町の「おばたレディースクリニック」で

県内の出生数



県内の赤ちゃん出生数 1975(昭和50)年に約2万5800人だったのが、85年には2万人を切り、2005年は約1万5300人に減っている。厚生労働省の人口動態調査では、05年の県内の出生率は人口1000人に対して8.4で全国平均と同じ。1人の女性が一生の間に産む子どもの数を示す「合計特殊出生率」は1.36となっている(全国は1.26)。